

近世の庶民文化



[近世の庶民文化 下载链接1](#)

著者:高尾一彦

出版者:岩波書店

出版时间:2006-12-15

装帧:文庫

isbn:9784006001674

江戸文化の研究にはいまだ未知の領域が広い。本書は近松、西鶴、歌麿らの作品に庶民の倫理意識、美意識、政治批判意識の反映をさぐり、経験的合理主義の発達と新しい人間の誕生を描きだした定評ある文化史研究の成果である。「京都・堺・博多」の三都市の様相を分析した論文を新たに付す。

「人は十三歳まではわきまえなく、それより二十四、五までは親の指図をうけ、その後は我と世をかせぎ、四十五までに一生の家をかため、遊楽する事に極まれり」（『日本永代蔵』）

元禄文化の隆盛を担った井原西鶴（1642—1693）は、若い時に金をもうけて家をかため、年をとったら使ってたのしむ、という循環的な人生論をここで語っている。「堅固」「才覚」「分別」「堪忍」などの徳目と、その結果としての「遊楽」「老いの楽しみ」……。

これは、この頃には都市周辺に貨幣経済の恩沢に浴する庶民が出てきたため、と著者は見る。ある程度自由に主体的に自分の身を処すことが可能となった庶民は、どんな文化を形作っていったのか。西鶴の町人物・武家物に潜在する面従腹背の政治批判、西鶴や近松の好色物に表れた支配者に对抗しうる倫理意識や美意識、大首絵と呼ばれる上半身を大きく描いた美人画で歌麿が表現した人間の個性……。『近世の庶民文化』は、これら具体的な作品に表れた庶民の意識をすくい出したユニークな文化史研究であり、1968年3月、日本歴史叢書（岩波書店）の一冊として刊行された。

今回の岩波現代文庫収録にあたり、『岩波講座日本歴史9近世1』（1963年9月）所収の「京都・堺・博多」を新たに加え、都市の側面から近世初頭の様相を明らかにした。

岩波現代文庫 学術167

作者紹介:

高尾一彦（たかお かずひこ）

1924年、大阪府に生まれる。京都大学文学部史学科卒業。神戸大学で日本近世史を講じ、近世庶民文化研究の分野で数多くの問題提起的な論文がある。著書『江戸幕府（国民の歴史）』『近世の農村生活——大阪近郊村の歴史』『横笛と大首絵』

目录:

[近世の庶民文化 下载链接1](#)

标签

评论

[近世の庶民文化 下载链接1](#)

书评

[近世の庶民文化 下载链接1](#)